説教要旨「日々の営みの中で」

ルカによる福音書２４章３６～４３節

エマオで復活されたイエス様と出会い、その復活を信じた二人の弟子たちは、すぐにエルサレムへと戻りました。他の弟子たちの所に行ってみると、そこでは、復活したイエス様がシモン・ペトロに現れたことが話されていたのです。エマオから戻った二人も、自分たちの前にもイエス様が現れたことを説明し、イエス様の復活について夢中になって話している最中に、「あなたがたに平和があるように」（36 節）という言葉と共に、イエス様が突然現れたのです。そこには、すでに復活されたイエス様と出会った弟子がいて、イエス様が復活したことを証言していたにも関わらず「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」（37 節）のです。

イエス様の復活は、それを目の当たりにした人にとってすら、なかなか信じることができない事柄です。ましてや二千年後を生きるわたしたちがイエス様の復活を信じることはさらに困難なことでしょう。イエス様が目の前に現れたのに、恐れおののき疑いを抱く弟子たちの姿は、復活を信じることがより困難な時代を歩むことになる教会の姿を先取りしているように思えます。

この疑い戸惑う弟子たちが信じるものとされるように、イエス様はあの手この手で働きかけています。エマオにおいては、同じ食卓につきパンを裂いて弟子たちに与えました。その姿は最後の晩餐での姿と重なります。そこで弟子たちの目は開け、イエス様の復活を信じるものとされました。また、イエス様の復活の証言を聞いても、なかなか信じることのできない弟子たちのために、イエス様はその手足を見せ、焼き魚を食べて見せました。食事という欠かすことのできない日々の営みにおいて、イエス様が共にいて下さることを示されるのです。

復活して今も生きておられるイエス様は、わたしたちと共にいて下さることを示して下さっています。それは特別なことではありません。わたしたちの日々の営みにおいて、“当たり前”のようにわたしたちを養っていてくださる神様の恵みに、このかたくなな心の目が開かれるように、共に祈りましょう。

（２０２１・５・１６　説教者：稲垣真実）